

# 紫陽花

泉鏡花

青空文庫



色青く光ある蛇、おびたゞしく棲めればとて、里人は近よらず。  
 其野そののやしろ社は、片眼の盲ひたる翁ありて、昔より齊眉かしずけり。

其片眼そのを失ひし時一たび見たりと言ふ、几帳の蔭に黒髪のたけ  
 なりし、それぞ神なるべき。

ちかきころ水無月中旬、二十日余り照り続きたる、けふ日ざか  
 りの、鼓子花ひるがおさへ草いきれに色褪せて、砂も、石も、きら／＼と  
 光を帯びて、松の老木おいきの梢より、糸を乱せる如き薄き煙の立ちの  
 ぼるは、木精こだまとか言ふものならむ。おぼろ／＼と霞むまで、暑き

日の静さは夜半にも増して、眼もあてられざる野の細道を、十歳とおばかりの美少年の、尻を端折はしより、竹の子笠被りたるが、跣足はだしにて、「氷や、氷や。」

と呼びもて来つ。其より市に行かんとするなり。氷は筵むしろづつみ包にして天秤に釣したる、其片端には、手ごろの石を藁繩わらなわもて結びかけしが、重きもの荷ひたる、力なき身体みのよろめく毎に、石は、ふらゝこの如くはずみて揺れつ。

とかうして、此の社の前に来りし時、太き息つきて立停りぬ。

笠は目深まぶかに被りたれど、日の光は遮らで、白き頸うなじも赤らみたる、渠かれはいかに暑かりけむ。

みみずみみずむくろむくろの骸の干乾びて、色黒く成りたるが、なかばなまゝしく、

心ばかり蠢うごめくに、赤き蟻の群りて湧くが如く働くのみ、葉末の揺るゝ風もあらで、平たき焼石の上に何とか言ふ、尾の尖さきの少し黒き蜻蛉とんぼの、ひたと居て動きもせざりき。

かゝる時、社の裏の木蔭より婦人おんな二人出で来れり。一人は涼傘ひがき畳み持ちて、細き手に杖としたる、いま一人は、それよりも年少わかきが、伸上るやうにして、背後より傘さしかけつ。腰元なるべし。丈高き貴女のつむりは、傘のうらに支ふるばかり、青き絹の裏眉のあたりに影をこめて、くらく光るものあり、黒髪にきらめきぬ。

怪しと美少年の見返る時、彼かの貴女、腰元を顧みしが、やがて此方こなたに向ひて、

「あの、少しばかり。」

暑さと疲労つかれとに、少年はものも言ひあへず、纒わざかに頷きて、筵を解きて、笹の葉の濡れたるをざわくと搔分けつ。

雫落ちて、雪の塊は氷室より切出したるまゝ、未だ角も失せざりき。其一角をば、鋸もて切取りて、いざとて振向く。睫まつげに額の汗つたひたるに、手の塞ふさがりたれば、拭ふひもあへで眼を塞ふぎつ。貴女の手てに捧たげたる雪の色は真黒なりき。

「この雪は、何どうしたの。」

美少年はものをも言はで、直ちに鋸の刃を返して、さらりと削り落すに、粉はばらりとあたりあたりに散り、ぢ、ぢ、と蟬の鳴きやむ音して、焼砂やきすなに煮え込みたり。

あきなひに出づる時、継母の心なく嘗て炭を挽きしまゝなる鋸  
を持たせしなれば、さは雪の色づくを、少年は然りとも知らで、  
削り落し払ふまゝに、雪の量は掌たなそこに小さくなりぬ。

別に新しきを進めたる、其もまた黒かりき。貴女は手をだに触  
れむとせで、

「きれいなのでなくつては。」  
と静にかぶりをふりつゝいふ。

「えゝ。」と少年は力を籠めて、ざら〜とぞ搔いたりける。雪

は崩れ落ちて砂にまぶれつ。

洩々捨てて、新しきを、また別なるを、更に幾度か挽いたれど、鋸につきたる炭の粉の、其都度雪を汚しつつ、はや残り少なになりて、笹の葉に蔽はれぬ。

貴女は身動きみじろもせず、瞳をすゑて、冷かにみまも瞻りたり。少年は便たよりなげに、

「お母つかさん様に叱られら。お母つかさん様に叱られら。」

と訴ふるが如く呟きたれど、耳にもかけざる状さましたりき。附添ひたる腰元は、笑止と思ひ、

「まあ、何うしたと言ふのだね、お前、変ぢやないか。いけないね。」

とたしなめながら、

「可哀さうでございますから、あの……」と取做すが如くにいふ。

「いゝえ。」

と、にべもなく言ひすてて、袖も動かさで立ちたりき。少年は上目づかひに、腰元の顔を見しが、涙ぐみて俯きぬ。

雪の碎けて落散りたるが、見るく水になりて流れて、けぶり立ちて、地の濡色も乾きゆくを、怨めしげに瞻りぬ。

「さ、おくれよ。いゝのを、いゝのを。」

と貴女は急込みてうながしたり。

こたびは鋸を下に置きて、筵の中に残りたる雪の塊を、其まゝ

引出して、両手に載せつ。

「み、みんなあげよう。」

細りたる声に力を籠めて突出すに、一掴みの風冷たく、水気むらくと立ちのぼる。

流るゝ如き瞳動きて、雪と少年の面を、貴女は屹とみつめしが、  
「あら、こんなぢや、いけないツていふのに。」

といまは苛いらてる状さまにて、はたとばかり搔退かひのけたる、雪は迂すべり落ちて、三ツ四ツに砕けたるを、少年のあなやと拾ひろひて、拳を固めて掴むと見えし、血の色颯と頬を染めて、右手めでに貴女の手を扼とりしほり、  
ものをも言はで引立てつ。

「あれ、あれ、あれえ！」

と貴女は引かれて倒れかゝりぬ。

風一陣、さらくと木の葉を渡れり。

## 三

腰元のあれよと見るに、貴女の裾、袂、はらくと、柳の糸を絞るかのやう、細腰を振りてよろめきつゝ、ふたゝび悲しき声たてられしに、つと駈寄りて押隔て、

「えゝ！ 失礼な、これ、これ、御身分を知らないか。」

貴女はいき苦しき声の下に、

「いゝから、いゝから。」

「御前ごぜん——」

「いゝから好きにさせておやり。さ、行かう。」

と胸を圧して、馴れぬ足に、煩はしかりけむ、穿物を脱ぎ棄<sup>す</sup>てつ。

引かれて、やがて蔭ある処、小川流れて一本の桐の青葉茂り、紫陽花の花、流にのぞみて、破垣<sup>やれがき</sup>の内外に今を盛りなる空地の此方に来りし時、少年は立停りぬ。貴女はほと息つきたり。

少年はためらふ色なく、流に俯して、掴み来れる件の雪の、炭の粉に黒くなれるを、その流れに浸して洗ひつ。

掌にのせてぞ透し見たる。雫ひたくと滴りて、時の間に消え失する雪は、はや豆粒のやゝ大なるばかりとなりしが、水晶の如く透きとほりて、一点の汚もあらずなれり。

きつと見て、

「これでいゝかえ。」といふ声ふるへぬ。

貴女は蒼く成りたり。

後馳せおくれぼに追続ける腰元の、一目見るより色を変えて、横様に

しつかと抱く。其の膝に倒れかゝりつ、片手をひしと胸にあてて。

「あ。」とくひしばりて、苦しげに空をあふげる、唇の色青く、

鉄漿かねつけたる前歯動き、地に手をつきて、草にすが縋れる真白き指の

さきわなゝきぬ。

はツとばかり胸をうちてみまも瞻るひまに衰へゆく。

「御前様——御前様。」

腰元は泣声たてぬ。

「しづかに。」

かすか 幽なる声をかけて、

「堪かんにん忍おし、坊や、坊や。」とのみ、言ふ声も絶え入りぬ。

呆れし少年の縫り着きて、いまは雫ばかりなる氷を其口に齎もたらし

つ。腰元腕かいなをゆるめたれば、貴女の顔のけざまに、うつとりと目

を睜みひらき、胸をおしたる手を放ちて、少年の肩を抱きつゝ、ぢつと

見てうなづくはしに、がつくりと咽喉に通りて、桐の葉越の日影

薄く、紫陽花の色、淋しき其笑顔にうつりぬ。





# 青空文庫情報

底本：「花の名随筆6 六月の花」作品社

1999（平成11）年5月10日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二卷」岩波書店

1942（昭和17）年9月

入力：門田裕志

校正：林 幸雄

2002年4月24日作成

2014年8月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.azora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 紫陽花

## 泉鏡花

2020年 7月13日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>